私の人生を突き動かした国　リトアニア

土居　美菜子

はじめに

社会人という立場で、国際青年育成交流事業に参加させていただけたことに心から感謝している。長期の休暇を取得し、この事業に参加できたことは、勤務先の理解があってこそ成り立ったもので、この経験をいかし、学び得たことを職務や社会に還元していかなくてはいけない。日本社会において、社会人の本事業への参加には難しい側面があるかもしれない。しかし日本を担う若者として、学生だけではなく、既卒者がより活発に参加できたなら、より団内に多角的な学びが生まれるはずだ。行政省庁や各種学校、企業や家庭（ホームステイ）といった、リトアニアの社会を構成する様々な側面を訪問、体験できる本事業での学びははかり知れない。なかでも、青年同士の交流に柱を置き、ディスカッションを中心としたプログラムを通じて、より良い日本、そして世界の未来を考える貴重な機会を得ることができ、私の人生の分岐点となった。事業への参加を支えてくださった全ての方に、心から感謝を申し上げたい。

リトアニアという国

この国に出会わなかったら私の人生はどんなにつまらないものだっただろう。それほどまでにリトアニアは、力強く、そして魅力的な国で、寝ぼけていた自身の人生観を突き動かしてくれた。

派遣前に私が想像していたリトアニアとは、豊かな自然に恵まれ、ヨーロッパの美しい街並みが広がる、ゆっくりとした時が流れる国、そんな印象だった。実際、リトアニアの森や湖、砂州は自然の雄大さを感じさせ、どの都市を訪れても見とれてしまうすてきな景観がそこにはあった。しかしそれ以上に私の心をとらえて離さなかったのは、リトアニア人から満ちあふれる力強さだった。リトアニア人の国を想う気持ちや、日本や世界情勢への強い関心。各人がしっかりとした意思をもって生きている姿。私には足りていないこと、そして本来ならば持ち合わせていなければいけないことを、当然のものとして彼らは有していた。まさかリトアニアでこんな衝撃を受けるとは想像もしなかった私は、すっかり自分のふがいなさに打ちのめされたが、この気付きはとてもありがたいものだった。リトアニアという国、そしてそこに生きるリトアニア人にすっかり惹かれた私は、素直な気持ちで彼らから多くを学んで帰国しようと、本事業参加への思いを新たにした。

また、2016年にリトアニアへ派遣されたことにも多くの意義を感じた。2015年に公開された、映画「杉原千畝スギハラチウネ」の影響で、日本とリトアニアを結んだ外交官である杉原千畝氏、そしてリトアニアへの関心が高まる中、翌2016年は「日リトアニア外交関係開設25周年」を迎える節目であった。また、2017年の世界記憶遺産登録に向けて岐阜県八百津町が申請した、「杉原リスト―1940年、杉原千畝が避難民救済のため人道主義・博愛精神に基づき大量発給した日本通過ビザ発給の記録」が国内候補に選定され、2016年はリトアニアに注目の集まる年だった。このような記念すべき年にリトアニアを訪問できたことに縁を感じると同時に、リトアニアへの関心が高まるこのタイミングをいかし、日本でまだあまり知られていないリトアニアという国について情報発信していきたい。

領事館が閉鎖した後、杉原氏が滞在したメトロポリスホテル
(カウナスを去る間際まで、渡航許可書を発給し続けた場所)にて

ホームステイ　同年齢のホストマザー

私のホストファミリーは、夫婦と赤ちゃんからなる家庭だった。ホストマザーとは同年齢ということもあって

親しみやすく、同年代の若者がどんな経験を通じ、何を感じ、どのように生きているのかを分かち合うことができた。

初めて会ったときから、ホストマザーは同じ年齢だけれど何かが違う、強いアイディンティティを感じていた。その理由は、彼女が独立前のリトアニアについて話してくれたときに判明した。1991年にソ連から独立したリトアニアは、今なお建国の気運があり、ホストマザーも幼かったとはいえ当時の記憶が残っている当事者だった。日本という国があって当然で、建国当時の想いや苦労を知らない私と彼女の間には、大きな価値観の違いがあった。ソ連の支配下で、祝日に女子は皆おそろいの衣装を着せられ歌い踊ったことを覚えていると話す彼女の持つ国への想いや危機感、世界への視点は、私に警笛を鳴らすような気付きを与えてくれた。「ときに協力をしつつも、ときに脅威となりうる隣国についてどう考えるか」、そんな話題を普通の会話で提起することは、日本ではほとんどない。しかしそれは彼女にとっては大げさに世界情勢を語っているわけではなく、今のリトアニアがあることが家族との幸せな暮らしに直結するからこそ、常に意識をしているのだと分かった。それは日本でも同じはずなのに、私たちは忘れている。世界中の若者が、もっと自国のことを思い、そして世界のことを考えながら生きていくことができれば、解決できる課題や未然に防げる争いがあるのかもしれない。そんなことを考えさせられる機会となった。

カウナスにてホストファミリーと城めぐり

リトアニア青年との交流

リトアニアの青年たちとの出会いは、この事業で得た一番の宝物だ。海外の青年とディスカッションをしたり、それぞれの文化を紹介したり、長期にわたって行動を共にし、こんなにも互いを分かり合える機会を持てることはそうそうない。一生続く友情を築けたことを心から嬉しく思う。

彼らから教えてもらったこと、気付かされたこと、与えてもらったことはたくさんある。

まず驚いたのは、英語を始めとした語学の堪能さだった。英語はネイティブとの違いがわからないほどに流暢で、会話をしていてもついていけないことがあり、ディスカッションにおいては日本人が議論で置いていかれてしまうことも多々あった。はじめこそ挫折感でいっぱいだったが、リトアニア人の言うことが理解できなければ日本人が聞き直し、日本人が拙い英語でも伝えようと話してみればリトアニア人が受け止めてくれる、そんな彼らの優しさのおかげで議論を交わし、親交を深めることができた。話を聞けば、リトアニアでは英語ができるようになるのは必然なのだという。ゲームをするにもその説明書は英語で書かれたものしかなく、映画を見るにもリトアニア語訳が存在しないので英語で理解するしかないのだと、教えてくれた。またEU加盟国であることも手伝って、イギリスやドイツ、スカンジナビア諸国といった国外への進学率も高く、英語以外の第3、第4外国語を話すことができる人もたくさんいた。環境の違いはあるけれど、彼らも日本人同様、決して英語が母国語ではないにもかかわらず、その語学への学習意欲や、努力、その姿勢に感銘を受けた。彼らともっと真に迫る会話をなせるためにも、自身の英語を上達させたいと痛切に感じた。世界を身近に感じる、そんな友人を持つことこそ、日本人の国際化を進める一番の動機付けになるのではないだろうか。

また、これもホストファミリーに感じたことと同様だが、リトアニアの同世代の若者たちは、日本人よりも多くを感じ、考え、日々を生きているように感じた。ディスカッションを通じても、たとえこれが日本語で交わされた議論だったとして、彼らの意見は深みがあり、納得させられるものばかりだった。リトアニア招へい青年たちのなかには自身で起業している青年もいて、日本よりも多様な働き方が存在し、自分で未来を切り開いていた。若者の起業への支援体制が整っていることも興味深かった。

加えて、リトアニア人の国民性も魅力の一つだった。日本人と通ずるところがあり、少しシャイで、面倒見がよく、優しかった。慣れてくると、ユーモアたっぷりでいつも周りを笑顔にしてくれる彼らとの毎日は、本当に楽しいものだった。国際青年交流会議にて、私がディスカッションでの学びを皇太子同妃両殿下に報告させていただくことになった際にも、三人がかりで原稿へのアドバイスをしてくれたことも忘れられない思い出の一つだ。本当に彼らには、尊敬と感謝の気持ちしかない。それに引き替え、こちらが彼らに伝えられたこと、伝えるべきだったことがもっとあったような気がして、それだ

けが後悔だ。語学や人としての素養を磨き、彼らに再会するときにその思いを果たしたい。

大好きなリトアニア招へい青年たちと共に

教育

自身が大学に勤めていることに関連し、リトアニアの教育事情には関心があった。なかでも印象的だったのが、Ph.D.（博士号）を取得するのが普通だととらえられている、高水準の教育レベルが敷かれていたことだ。また、働きながらPh.D.を取得するスタイルも多いようで、たとえば大学で働きながら通学する等、それをサポートする環境が整っていたことも興味深かった。国際機関で働く場合、博士号は必須である実状からも、リトアニアの世界への発信力を感じた。また、リトアニアではジェンダーレスが進んでおり、大統領や国会議長も女性が務める等、女性の社会進出が著しい。教育現場でも女性が出産後も学びを進めることも多く、日本でもこのような学び方がより身近なものになるよう、見習う点ばかりだった。

これからの自身とリトアニア、そして世界

職務に関連しては、自身の勤める大学とリトアニアの大学で協定を結び、リトアニアでの学びの機会を学生に提供したいという目標ができた。私自身に権限があるわけではないけれど、実現のために全力を尽くしたい。リトアニアで学ぶことは、学生にとって実りがあるのはもちろんのこと、日本という国をより良く、より強くする一助にもなると確信している。リトアニアと友好を築くことは、日本にとってヨーロッパとの懸け橋を築くことになる。また、アメリカとの同盟を主として安全保障を考える日本と、NATOという枠組みで安全保障をとらえるリトアニアと、相互に学び合う点も多いはずだ。

個人としては、リトアニア青年たちとの親交を深めつつ、在日リトアニア人との交流や、日本へのリトアニア人留学生のサポートをしたい。東京在住ということをいかし、オリンピックに係るボランティア活動にも取り組みたい。あわせて、リトアニア語の学習も進めたい。そしていつかリトアニアに住んでみたいという夢もある。

世界という大きな舞台で、多様な価値観を持って生きる道をこの事業は教えてくれた。これから結婚や出産という大きな変化に直面しても、おばあさんになっても、リトアニアに移り住んでも、そこには無限の可能性がある。きっと10年後の私から見れば、今の私まだまだ若く、何でもできるように見えるはずだ。いつでも、諦めるにはまだ早い。その気持ちを忘れずに、リトアニアを第一歩として、世界に挑戦していく人生を歩みたい。